

パネルディスカッション 「探究の軌跡を可視化する——デジタル・ポートフォリオの可能性」

開催日

2026 年 3 月 22 日（日）14:00～16:00

開催場所

京都大学北部構内 北部総合教育研究棟 益川ホール

参加人数

小中高等学校教員、教育委員会関係者、大学教員等 40 名

後援

国立研究開発法人科学技術振興機構

実施の様子

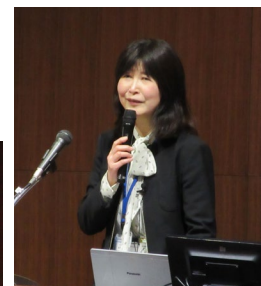
京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM では、2026 年 3 月 22 日（土）に、京都大学北部構内 北部総合教育研究棟 益川ホールにおいてパネルディスカッション「探究の軌跡を可視化する——デジタル・ポートフォリオの可能性」を開催しました。本イベントは、内閣府による SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）の課題「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」における研究開発「真正で探究的な学びを実現する教育コンテンツと評価手法の開発」（研究開発責任者：松下佳代）の一環として行われました。総勢 40 名の教職員、教育委員会関係者、大学教員・院生等が参加しました。

本パネルディスカッションでは、デジタル・ポートフォリオを用いて実際に探究学習を進めてきた 4 校の代表生徒に、デジタル・ポートフォリオを用いた発表を行っていただき、その上で、高校生と SIP プロジェクトメンバーとの間でデジタル・ポートフォリオの意義と課題についてディスカッションを行いました。

はじめに、SIP サブ課題 A・研究開発責任者である京都大学大学院教育学研究科の松下佳代教授より開会のあいさつがありました。続いて愛知県立芸術大学の石田智敬准教授より本プロジェクトで開発しているデジタル・ポートフォリオについての解説がありました。次に北海道大学の田中孝平助教からは、高槻高等学校と北海道札幌啓成高等学校の概要説明がありました。花園大学の久富望講師よりビデオレターにて秋田県立湯沢高等学校と秋田県立横手城南高等学校の概要説明がありました。各校のカリキュラムや探究の様子について紹介されました。



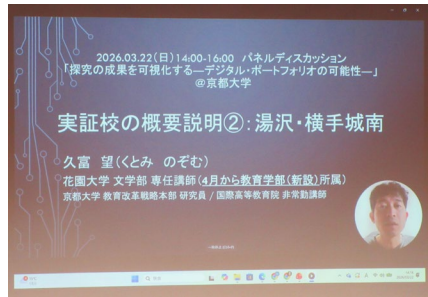
石田智敬 准教授



松下佳代 教授



田中孝平 助教



久富 望 講師 (ビデオ登壇)

実証校生徒からの報告では、はじめに高槻高等学校 2 年生の村田博亮さん、辰巳陽紀さん、福澤周拓さんから、テニスボールの自動回収機を開発する探究活動について発表がありました。初期の研究動機だけでなく、そこから調査や実験を進める中でどのような壁に直面し、それをどのように乗り越えてきたのかという研究の過程

について、デジタル・ポートフォリオを用いながら、丁寧に説明されました。同じく高槻高等学校 2 年生の北尾和佳さんから、水難事故防止を動機としながら、水の流れによる力を物理実験によって測定する探究活動について発表がありました。実験や分析の過程を、デジタル・ポートフォリオを用いて詳細に語り、自分たちが直面した研究における困難や成果、研究への熱い思いが表現されました。続いて北海道札幌啓成高等学校 1 年生の金野有希さんから、思い込みの力についての探究活動の発表がありました。発表の中では、主に、自分の興味関心がこれまでの学習活動を通してどのように変化し、それが探究活動にどのように影響したかについて、記録の積み重ねをもとに語られました。その後、秋田県立湯沢高等学校 2 年生の阿部寧々花さんからこれまでの学びがどのように探究活動につながったのかという視点を中心として発表がなされました。データ分析や対話型論証等の実践を通して、データに基づいて、多角的な視点から自らの主張を揺るぎないものにするためにどのような方略を獲得してきたのか、それが探究活動でどのように役立ったのかについて、デジタル・ポートフォリオ内の記録をもとに述べられました。また、秋田県立横手城南高等学校 2 年生の村田栞渚さんから、医療現場への AI 活用に関する探究活動について発表がありました。データが何を示しているのかを詳細に読み解くことにこだわり、探究を進めた成果について説明されました。



高槻高等学校 (左から)
辰巳陽紀さん、福澤周拓さん、村田博亮さん



高槻高等学校
北尾和佳さん



北海道札幌啓成高等学校
金野有希さん



秋田県立湯沢高等学校
阿部寧々花さん



秋田県立横手城南高等学校
村田栞渚さん



会場の様子

その後、休憩を挟み、後半は、各実証校の代表生徒 5 名と京都大学大学院教育学研究科の石井英真准教授との間でディスカッションを行いました。まず、石井准教授からは、デジタル・ポートフォリオ体験全体の感想や気づきについての問いかけがありました。生徒たちからは、デジタル・ポートフォリオの作成によって、自分が行ってきたことを振り返ることが容易になったという意見やその振り返りによって研究の最中や今後の研究にも役立たせることができたという意見、研究への愛が深まったという意見が出ました。また、あえて挫折や失敗を含めて研究について物語る意義について問いかけられると、生徒たちは、挫折や失敗に目を向けることで、それをどう乗り越えたかというプロセスこそが努力の証であるという認識が得られると話しました。失敗への着目は、不可能を可能にしたという実感を得ただけでなく、失敗を恐れずに物事に取り組むことや今後の研究に繋げるための有意義なものだったと強調されました。それらの発言を受け石井准教授から、探究活動においては途中で何を経験したか、それがどう糧になったかが重要な観点であり、それがプロセスを語ってほしかった理由であると説明されました。

次に、デジタル・ポートフォリオをよりよいものにするための改善点や今後の願いについての質問がありました。ツールへの要望としては、まず直感的な操作性や円滑な動きを求める声が多く挙がりました。また、研究途中の吐嗟の閃きを逃さず記録できる機能の追加や、共同編集機

能の装備によってグループ研究に活用したいといった、具体的な活用イメージに基づいた提案がなされました。

最後に、代表生徒たちから今日のパネルディスカッションに参加した感想とこれからデジタル・ポートフォリオを使う高校生（大学生・大学院生）に向けてのアドバイスやメッセージを語っていただきました。全体を通した感想として、今回の経験は単に研究の成果を報告するに留まらず、プロセス全体を俯瞰する貴重な機会となり、直面した挫折や、研究に対する愛を語ることで、自身の探究活動を再定義する有意義な時間になったという総括的な意見が出されました。また、これからデジタル・ポートフォリオを使う高校生に対しては、日記をつけるような感覚で記録を楽しんでほしいというエールが送られました。その都度、気づいたことを率直に、かつ恐れずに記録し続けることの重要性が語られ、そうして蓄積されたデータが、将来的に本人の想像を超える大きな価値を持つことが、実体験に基づいた確信として示されました。



パネルディスカッションの様子

パネルディスカッション終了後に実施したアンケートでは、デジタル・ポートフォリオについて、学習過程の可視化や振り返りの深化、失敗の共有が可能である点が高く評価されていました。また、高校生の生の声や主体的に学ぶ姿が印象的であるという意見も多く寄せられました。さらに活用面では、探究活動にとどまらず、教科指導や教員自身の振り返りへの応用可能性も指摘されました。一方で、学校全体での運用の難しさや教員間の意識差といった課題も挙げられました。加えて、研修の改善点としては、具体的事例のさらなる提示や質疑応答の機会の充実を求める声が見られました。

本会は、デジタル・ポートフォリオが研究の成果だけでなく、挫折や試行錯誤を含むプロセスを可視化し、生徒のメタ認知を促す有効なツールであることを示しました。記録の蓄積と紡ぎ直しが内省を深め、探究活動を再定義する基盤となる可能性を確認した、極めて有意義な機会となりました。

以上

※登壇者の所属は、2026年3月時点のものです。

文責：岡野桂奈（京都大学大学院教育学研究科修士課程）